

【文書 02】

雨期におけるインド仏蹟現地調査報告会

森 章司

中島克久

本澤綱夫

Parijat TIWARI

(2001.10.26)

はじめに

雨期の調査の意味

雨は降らなかった

インドの奇跡

インドラ神様に見放された私たち

調査の成果

研究分担者の紹介

第1部 雨期の仏蹟調査の足取り

振り出しの町；デリー

西果ての町；マトゥラー

神話の町；サンカッサ

三蔵法師の町；カンナクツジャ

裏切りの町；コーサンビー

インドを象徴する町；サールナート

さまよえる町；アヨーディヤー

失われた町＝カピラヴァットゥ

ババジの町；クシナーラー

ジャイナ教の町；パーヴァープリー

山の町；王舎城

砂の町；ボドガヤー

第2部 お釈迦様はどの道を通ってクシナーラーに着かれたか

『涅槃経』の記述

ケーサリヤの仏塔

アンバ園

Nādikā 族の村

Koṭigāma

涅槃経の出発点

増水のガンジス河

Koṭigāma の位置

とっておきの根拠

Koṭigāma 以降

まとめ

はじめに

東洋大学の森でございます。中央学術研究所を通して、立正佼成会の皆さまには私どもの「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」をご援助、ご激励いただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで持ちまして、釈尊の伝記と釈尊教団の形成史の大体の輪郭が明らかになってまいりました。そこでこの11月18日（日）の研究所の学術総会の折に、その概略をご報告させていただくことになっております。それはもちろん今までの学界における研究成果の上に乗っかっているわけですが、そのイメージは従来のものとはだいぶ異なるようなものになるのではないかと思います。ぜひご期待いただきたいと思います。

雨期の調査の意味

そこで今日は、この夏の8月1日から30日までのちょうど1か月の間、雨期のインドの仏蹟調査をさせていただきましたので、そのご報告のみに限らせていただきたいと思います。わざわざ「雨期の」と限定いたしますのは、一昨年（1999年）の11月の半ばから12月の初めにかけての一ヶ月弱の間、乾期のインド仏蹟調査をさせていただきました。この時にも報告会をさせていただきましたので、ご記憶いただいている方もいらっしゃるかと存じます。

釈尊時代のインドでは、乾期には釈尊を初め仏弟子たちは「遊行」すなわち諸国漫遊の旅をするのが習わしでしたから、この遊行のルートとその実態を追体験してみようというのが、調査の主な目的でした。しかし反対に雨期には、この遊行が禁じられまして、「雨安居」とか「夏安居」といいますが、一ヶ所に定住して僧院で生活するのが習わしでした。規定ではこの期間は3ヶ月ですが、おそらく多くの比丘たちは前安居と後安居を併せて4ヶ月の雨安居に住したのではないかと思います。

4ヶ月といえば一年の3分の1に当たります。したがって釈尊もその生涯の3分の1を雨安居で過ごされたわけです。ですから釈尊の伝記を細部にわたって再現するためには、この3分の1をどのように過ごされたかということを追体験してみなければなりません。そこで勇気を振り絞って、わざわざ条件の悪い時期を選んで、インドを調査したわけでございます。

出発前の情報では今年のインドは雨が多いということでありましたので、この計画は身動きが取れなくて、それこそ机上の空論に終わるかもしれないという覚悟の上で出発いたしました。インドの雨期は猛烈なもので、雷交じりのシャワーよりも強い雨が1週間くらい続いて、2、3日置いて、また1週間雨が降り続くという状態が何ヶ月も続く、だからインド中が水浸しになって、身動きが取れなくなるかもしれない、などと脅かされていたわけでございます。

雨は降らなかった

ところが皮肉なことに私どもがインドに到着してからは、ぴたりと雨が降らなくなりました。確かに写真（写真1）のように猛烈な雨がなくてはありませんでした。それでもシャワーと呼べるような雨は、多く見積もっても一か月の間に合計して7時間余りで、この外しとすと雨が合計24時間余りしか降っていないのではないかと思います。

いかに雨が少なかったかを知っていただくために、2年前の乾期の時の調査の河の水量と今回の雨期の水量を比べられる写真を選んでみました。



写真1

これはコーサンビーという古代都市の傍を流れるヤムナー川の写真です（写真2）。上が乾期の写真で、下が雨期の写真ですが、ほとんど水量は変わりありません。



Udena 王の城壁跡から望む Yamuna ①

上；1999.11.24

下；2001.8.7

次はパトナのブッダガートあたりのガンジス河の写真です（写真3）。

近くの穀物倉庫の上から取っておりますので、かなり遠くまで見はるかすことができます。これも水量はほとんど変わりはありません。



ゴール・ガル（穀物庫）から眺める Ganga River

上；1999.11.17, 下；2001.8.18

これは皆さんご存知のベナレスの「ダシャーシュワメド・ガート (Dashashwamedh ghat)」のところの写真です（写真4）。ここから町の方に上がったところに有名なゴールデン・テンプルがあります。シヴァ神の像が描かれている塔のところをご覧くださいと、ここでもほとんど変化のないことが判ります。



写真 4

Dashashwamedh Ghat

上 ; 1999.11.27

下 ; 2001.8.10

このように今年のインドの雨期は雨が降らなかったわけでありまして、ですからインドの各地で、旱害の心配を聞きました。皆さんの中にもお行きになった方もあると思いますが、ヴェーサーリーの博物館の前にはタンクがございます。その向こうに日本山妙法寺の仏塔が見えますから、ご記憶の方も多いのではないかと思えます。これがその貯水池です（写真4）。



仏典ではヴェーサーリーは重閣講堂の「獼猴池」という池のが有名です。「みこう」は猿でありまして、猿がお釈迦様のために蜜を捧げたという伝承のあるところです。ヴェーサーリーは周辺よりも少しだけ土

地が高いところですので、といいましても周囲が海拔45メートル程度で、ヴェーサーリーは55メートルという程度のものでありますから、高台というようなものではないのですが、しかし河の水を引いて作る灌漑用水路というものができませんので、雨水を溜めるしかありません。そこでヴェーサーリーには方々にタンクが作ってあります。不思議なことに、先程の「獼猴池」についてはパーリ聖典は全く言及しません。『西域記』ではこの池は猿が掘ったとしておりますように、人工的な池であつたに違いありません。しかし今年は雨不足で、例年の1/4しか貯水量がなくて、飢饉が心配だと言っておりました。

地点	1月	2月	3月	4月	5月	6月
New Delhi	16.7	19.3	15.2	14.7	23.8	68.6
Allahabad	17.4	13.9	8.6	7.7	14.2	82.8
Calcutta	15.1	24.2	32.8	56.4	123.5	291.7
東京	45.1	60.4	99.5	125.0	138.0	185.2
大阪	45.8	60.4	102.0	133.8	139.4	206.4

地点	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
New Delhi	225.0	254.2	124.5	16.5	6.3	11.1	795.9
Allahabad	278.3	261.7	208.6	34.9	10.3	4.3	942.7
Calcutta	374.9	345.7	295.9	133.4	23.2	12.3	1729.1
東京	126.1	147.5	179.8	164.1	89.1	45.7	1405.3
大阪	156.9	94.8	171.5	107.5	65.1	34.4	1318.0

インドの奇跡

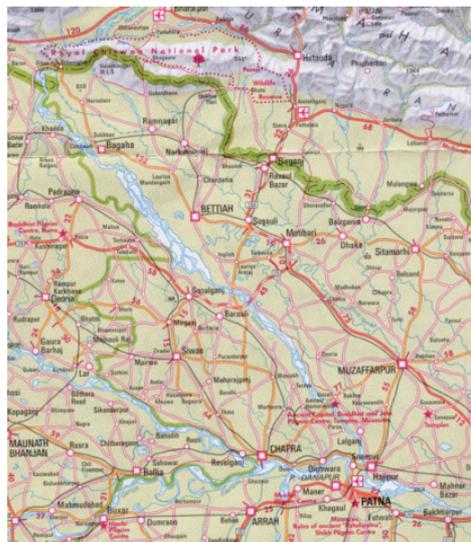
ですから旱魃の記事が新聞に出ます。写真は2001年8月19日付けのHindustan Times, Patnaという新聞の紙面ですが(写真5)、『drought』すなわち「干ばつ」という文字の見える上欄の記事はこの旱害を伝える記事です。

ところが奇妙なことに、そのすぐ下には水害の記事が並んで出ています。旱害と大水が同時に起こるなんてどう考えてもあり得ない話のように思われるでしょうが、このような奇跡が起こるのがインドなのです。



写真 5

種明かしをすれば簡単で、ほとんどの主な仏蹟のあるのはビハール州で、この記事もこの州の新聞なのですが、この州の北部にはガンダック河という河が流れています（地図 1）。



地図 1

この河は北の方から流れてきて、パトナのところでガンジス河に合流します。したがって水源はヒマラヤ山脈にあり、ネパールを通過してビハール州に流れ入っているわけです。ところが7月中に雨がたくさん降って、ネパールではダムに水を蓄えきれなくなって、そこでこらえ切れずに放流してしまったために、下流のビハール州が水浸しになってしまったというわけです。8月4日のテレビでは北部ビハールの70%、13district（郡）が浸水しているとか、翌日のテレビではビハール州の37の districtのうち30が浸水している、と報道されておりました。ところが一方では早魃の記事なんですからなんととも奇妙です。

しかしダムが放水したくらいで、ビハール州北部の70%のディストリクトが洪水になるというのは大袈裟じゃないかと疑問を持たれるかもしれません。しかし前回の報告会でもお話いたしましたように、ガンジス河沿岸はヒンドゥスタン平野と言いまして、北はヒマラヤ、南はデカン高原に挟まれた広大なお盆の底の部分に当たります。全く高低のない、真平らな地形ですから、お盆の中にさかずき一杯の水をこぼすと、お盆全部が水浸しになるようなものなのです。

ですからそれほどたくさんの雨が降らなくても、インドには簡単に洪水が起こるのです。しかし乾期に

はほとんど雨の降らないインドにあっては、この洪水は自然の貯水になるわけでありまして、インドは降った雨が海に流れるようにするというような治水の仕方はしていないといつてよいと思います。インドの河は全く護岸工事というものをしておりません。洪水は一面ではインド式の貯水であり、利水であるといつてよいのです。

ですから洪水の被害は田畑が冠水するというよりは、陸の孤島になった村々に十分に食料が運ばれていない、政府はそれに十分に手を打っていないというようなことが記事の内容になるわけです。

このように幸いにといいますか、あるいはせっかく雨期を体験しに行ったのだから不幸にというべきでしょうか、私たちが行く先々ではちっとも雨が降りませんでした。ですから計画はやっぱり机上の計画であったわけでありまして、実は計画以上にすいすいと運びました。余裕が生まれたお陰で現地で2日間も研究会が持てました。日本に帰ってからまとめるとなると、なかなか時間もとれなくて、記憶も薄れてしまうという心配もありますが、現地でホットなうちに整理し、新しい調査事項を確認できるという意味では、とても有意義な時間でした。

インドラ神様に見放された私たち

しかし日本に帰るときについ2、3日前にベナレスから帰ってきたというインド人のガイドさんに聞きましたら、19日と20日に雨が降って水位が一気に上がり、21日には水位がガートの階段の最上部まで来て、そこに作ってある警察官の詰め所まで浸水したということでした。これは先程見ていただいた写真ですが（写真4）、シヴァ真の絵のある塔の向かって左側のすぐ隣りがその詰め所です。

先程ご覧いただいたパトナの穀物倉庫の上から写真を取りましたのは18日です。雨が降ったというのは19日と20日ですから、その前日にあたります。19日と20日はまだパトナに居りまして、19日には一日ホテルで研究会をやっておりました。その日には確かにパトナにも雨が降りました。パトナ博物館のパンデーさんが尋ねてくれまして、びしょぬれになったと言っていたのを思い出します。しかしシャワーも1時間半くらいで、後はしとしと雨でしたから、大した雨じゃないと思っていたのです。ところが21日にパトナから王舎城に行く途中で、ガンジス河がちらっと見えるところがありまして、そこでは道路際まで水が来ているので変だなと思いました。だから19日、20日にはガンジス河の上流のところであくさんの雨が降ったのではないかと思います。ですからその間に一気に水量が増えたようですが、これに気がつかなかったわけで、大変残念なことをしました。

ですから私たちは、インドへインドの雨を体験しに行ったのに、雨も体験できず、水量の上がった河を見ることさえもできないで帰ってきてしまいました。雨をつかさどるインドラ神様に見放されて、太陽神様であるスーリヤに取り憑かれたということになるのでしょうか。

調査の成果

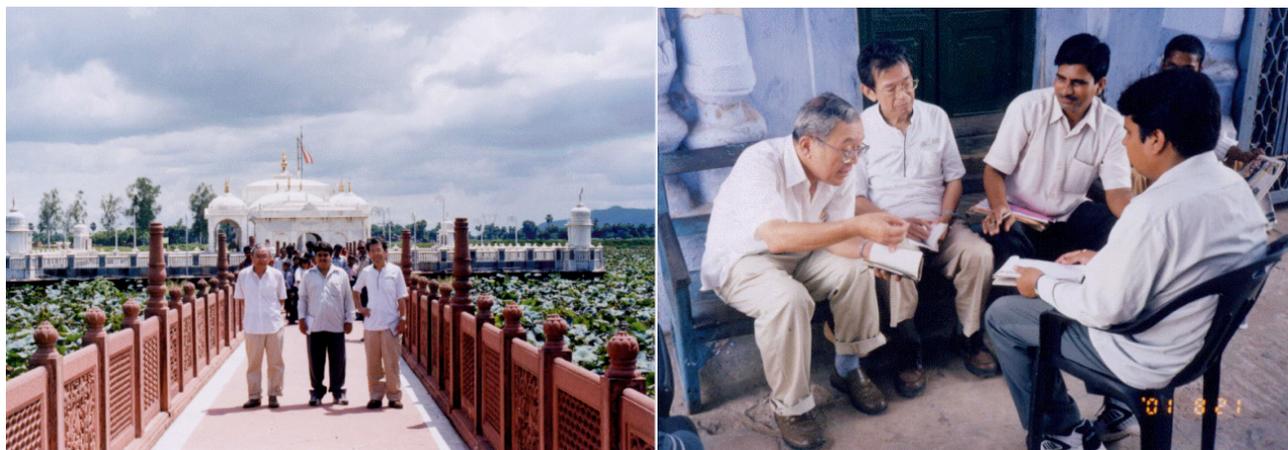
ともかくこういう状態でありましたので、雨期の調査という大命題は余り達成できませんでしたが、しかし前回からの課題になっておりました「釈尊最後の旅のルート」調査や、ジャイナ教のサンガ調査など、その他の調査目的は順調に達成できました。

例えばこの写真のように（写真6）、ジャイナ教のディガンバラ派のムニに詳しくお話を伺うこともできましたし、



写真6

ジャイナ教の開祖であるマハーヴィーラが亡くなったパーヴァープリのジャイナ教のお寺でも、マハーヴィール・カレッジの哲学の先生をしておられる方に詳しい話を伺うことができまして（写真7）、釈尊教団がどのようなものであったのかをイメージするのにずいぶん役に立ちました。



その外今回の調査の成果は7項目ほど、すでに文書にしてあります。ぜひこの話もさせていただきたいと思うのですが、今限られた時間の中で、その全部をご報告することはできませんので、第1部としては、我々の調査の足取りを簡単にご報告させていただきまして、少し休憩をいただきまして、第2部として「釈尊最後の旅のルート」をご報告させていただきたいと思います。しかし十分に練り上げてございませんので、予定した時間通りには進まないかもしれませんが、よろしくご了解いただきたいと存じます。

研究分担者の紹介

なおご紹介させていただきたいと思いますが、今回の調査は森、中島、本澤の3人が当たらせていただきました。それからもう1人、写真7に写っている少し小太りの男がParijat TIWARIというインド人でありまして、我々についてくれましたガイドであります。前回の乾期の調査にもガイドを務めてくれまして、私たちの研究に大変興味を持ってくれまして、先程お話ししました2回の研究会には、彼も参加してくれました。そこで私たちも今では彼を研究分担者の1人として扱っています。

大変な努力家、勉強家でございます。それこそ朝から晩まで私は彼の家庭教師でした。私たちは彼にガイド料を払っておりますが、家庭教師代とチャラにしてもらいたいくらいの気持ちです。お陰で仏教に対する知識も十分に持つようになりましたし、私たちの研究目的も調査したい事項も十分に知悉してくれ



ておりますので、それこそ私たちの耳となり口となって、活躍してくれました。あいにく私たち3人は余り言葉が堪能ではありませんので、彼なくしては調査の成果はなかったであろうと思います。

また Rampati という運転手さんにもお世話になりました。たいへん優秀な運転手で、彼も前回の乾期の調査に引き続いてのおつきあいです。彼ら2人は観光ツアーについたほうが余程お金になりますし、一カ月という長丁場は大変だったと思いますが、私どもの要請に応じて、進んで参加してくれました。

特に TIWARI は家族思いでありまして、ボンベイに住んでいる妹さんが重い病気にかかって、今デリーの彼の家にいるということで心配しておりまして、そこで毎朝30分くらい、欠かさずにハヌマーンという猿の神様のお経を唱えておりました。しかし我々が3週間余のインド各地の調査を終わって、デリーに帰ったその晩に妹さんは亡くなりました。自分の顔を見て安心したように亡くなったと言っておりました。

我々の研究は立正佼成会の皆さんを初め、このようなたくさんの人たちの応援をいただいていると感謝しておりますので、敢えてご紹介させていただいた次第です。

第1部 雨期の仏蹟調査の足取り

前置きが長くなってしまいました。続きまして第一部の「雨期の仏蹟調査の足取り」に入らせていただきます。

本当は観光案内的なことも申し上げさせていただいたほうが、興味をお持ちいただけるのではないかと思います。時間がございませんので、どのような目的で、どのようなことを調査したかということをご報告させていただくことで、責めを果たさせていただきたいと思っております。

振り出しの町；デリー

まず私どもは8月1日の夜にニューデリー空港に到着いたしました。「振り出しの町・ニューデリー」となっておりますが、無味乾燥な報告にならないように、できるだけ記憶に留めていただきやすいように3人で苦心して、それぞれの町のニックネームを考えました。われながらセンスないなあと思っております。お笑い下さっても結構でございます。覚悟しております。

翌日、私の大学時代の同級生が海外協力事業団（JICA）のインド事務所長をして居りまして、佐藤忠君と言いますが、インド考古局の長官と面識があるというので、事前にその方に紹介してくれとお願いをしてありました。そこで早速翌日に、ニューデリーの国立博物館の隣にある考古局で長官とお会いして、私どもが関心を持っている分野の情報と各地の博物館の館長さんへの紹介状を書いてもらいました。長官は Mrs. Komal ANAND とおっしゃる女性でありまして、実にてきぱきと各方面に電話などで指示して、我々の要求に応じてくれました。写真はその時の様子です（写真8）。



写真 8

大体インドのお役所の窓口に行きますと、つまらないささいな用件でもだらだらと時間がかかるのですが、これがインドかと思うくらいてきぱきとしていらっしやいました。私は日本でもあれほど有能な官吏は見たことがありません。

また Dr.Ram SHARAM さんという考古学者を呼んで下さっておりまして、この方は 1 週間後にパトナ博物館と初転法輪の地であるサールナート博物館の 2 つの博物館の館長として赴任されるということでありまして、この方には後にパトナで大変お世話になりました。写真はそちらの方で紹介させていただきます。

西果ての町；マトゥラー

わざわざ最果てを「にしはて」と書きましたが、最果ての町でもよかったかなと思っております。マトゥラーというのは、デリーからヤムナー河沿いに少し下った最初の大きな町で、ちょうどタージマハールで有名なアグラとの中間くらいにあります。こう命名したのはお釈迦様はインド各地を遊行して歩かれましたが、この辺が西の方では最果てであるからです。

お釈迦様はおそらくこれよりも西には足を踏みだしておられないと思います。それではこのマトゥラーには来られたことがあるかといえば、実はそれもはっきりいたしません。研究者によってはここに来られたことがあるとしますが、この人が使っている文献資料は、よく似た名前であるけれども、このマトゥラーではないことは確実でありますので、それは証拠としては使えません。確実な資料 (AN.4-6-53) は「あるとき世尊は、Madhurā (=Mathurā) と Verañjā との間の大道を行かれた」としております。Verañjā はこの東にあったと考えられる地名でありまして、これが Madhurā (=Mathurā) から Verañjā に帰られる途中なら、お釈迦様は Madhurā (=Mathurā) に行かれたことがあるということになります。しかし Verañjā から Madhurā (=Mathurā) に行かれる途中なら、Madhurā (=Mathurā) に行かれたことがあるというわけには行きません。しかしもしそうなら Madhurā (=Mathurā) を目指して遊行されていたのであって、いずれにしても Madhurā (=Mathurā) に行かれたのではないかという推測もできます。もう 1 つの資料 (AN.5-22-220) は「Madhurā には、平坦でない、塵が多いなどの 5 つの欠点がある」としてあります。どうもこれもマトゥラーには入らなかったということが言いたいようです。パーリ聖典にはマトゥラーについてはこの 2 つの記述しかありませんから、釈尊は Madhurā (=Mathurā) には行かれなかったということになるかもしれません。ということになると、Mathurā はヤムナー河の西岸にありますから、お釈迦様はヤムナー河は渡られなかったということになります。この他の地点でも、ヤムナー河を西に渡られたとい

う証拠はありません。したがってヤムナー河が釈尊の行動範囲の西端ということになります。ちなみに東側はビハール州の東の方に Kosi 河という河がありますが、それは東の果てになると思います。これは Videha という国の国境線でもありました。

しかし確実にその手前の *Verañjā* (ヴェーランジャー) までは行っておられます。そしてその東が *Soreyya* (ソーレヤ) という町でありまして、その東が後に紹介する *Saṅkassa* (サンカッサ) です。ちなみに地名はここではパーリ語で紹介させていただいています。*Saṅkassa* はサンスクリット語では、サンカーシャ (*Saṅkāśya*) になりますが、混乱いたしますので、パーリ語に統一させていただきました。しかしレジメには両方を書いておきましたので、ご参照下さい。

実はこの *Verañjā* と *Soreyya* が現在地ではどこに当たるのかも調査したかったのですが、道が悪いということで、その方面に入ることができませんでした。マトゥラーのところでヤムナー河を渡ってその東側の地域です。そこでマトゥラー博物館の Mr.Girraj PRASAD (Guide Lecturer of Archaeological Museum of Mathura) に聞き取り調査をいたしました。これがその時の写真です (写真9)。しかし残念ながら有力な情報を得ることはできませんでした。

それからマトゥラーはもう一つの顔を持っています。それは仏教美術の都という顔です。ご承知のように仏教はお釈迦様以来長い間、仏様の姿を形に表すことはタブーとして避けてきました。それがお釈迦さまが亡くなってから 500 年ほどした紀元 1 世紀の終わり頃に初めて形に表されました。その初めが有名なガンダーラとここマトゥラーです。ガンダーラはギリシャ美術の影響を受けたヨーロッパ風の仏像ですが、ここマトゥラーは純インド風の仏像です。

ところでここを訪ねましたのは、Malalasekera という仏教学者が “Dictionary of Pali Proper Names” (p.439) において、 ‘Madhurā is generally identified with Maholi , five miles to the southeast of the present town of Mathurā or Muttra’ と書いておりまして、要するにマララセーケーラは古代のマトゥラーは今のマトゥラーとは違う、今の町から 5 マイルほど南東にある Mohali というところだということですから、それを確認したかったからです。しかしこれはマトゥラーの美術館の展示品を一覧するだけで解決いたしました。確かに *Maholi* からも仏像が発掘されております。これがそれです (写真10) です。しかしこれは菩薩ですが、ちゃんと人間の形をしております。すなわち紀元 1 世紀以降に作られたということは明らかです。このような像が釈尊からそう遠くない時代に作られたとは考えられません。

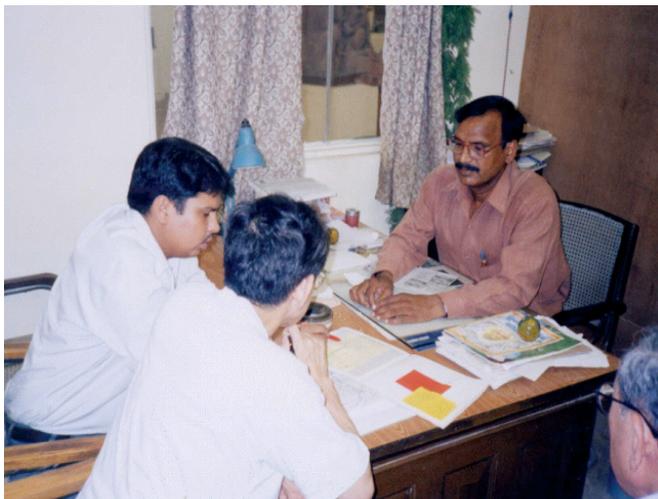


写真9



写真10

Mathura ⑥ :

COLOSSAL BODHISATTUVA

FIND PLACE – MAHOLI (MATHURA) c.1st cent. AD

しかしこれをご覧下さい（写真 11）。これは博物館のそばの現在のマトゥラーの市内から発掘されたもので、これにはお釈迦様が表されるべき部分に法輪や菩提樹や仏塔が表されています。仏を人間の形で表すことを避けて、法輪や菩提樹や仏塔で象徴的に表しているわけです。こちらの方は紀元前のもので、このほうが古いことが1目して判ります。したがって古代のマトゥラーは Maholi ではなく、現在のマトゥラーであったことがわかります。



写真 11

神話の町；サンカッサ

先に申しあげましたように、当初我々はマトゥラーから Veranjā と Soreyya を探しながら、サンカッサに向かうつもりでした。しかし道が悪くて、ジープでなければ駄目だったので、諦めましてタージ・マハールを見学した後サンカッサに向かいました。

余談ですが、実は驚いたことに、インドの観光地は軒並みに外国人に対しては、今年から法外な入場料を取るようになってまして、タージ・マハールはまた別格で、確か 1000 ルピーであったと思います。日本円にいたしますと 2500 円ほどになります。これは本来の調査とは関係がありませんので、引き返そうかとも思いましたが、メンバーの中に初めての者がおりましたので、せっかくだからということで、自由行動ということにいたしました。私たちは1日1人あたり 800 ルピーがホテル代・食事代を含めた生活費ということで、こんなことのためにとても調査費用の中からは払いきれなかったからです。

さてサンカッサは釈尊が亡くなったお母さん、すなわちマハーマーヤーのために切利天というところへ上って説法をされて、帰りはここに降り立った、そのとき帝釈天と梵天が黄金と瑠璃と白金の階段を作って、お釈迦様にしたがって下りてきた、とされている場所です。これは「三道宝階」と呼ばれています。これはそれを記念して建てられたアショーカ王の法勅石柱です（写真 12）。紀元前 3 世紀のもので、



写真 12

原始聖典に説かれる釈尊の教えは非常に合理的なものでありまして、したがって釈尊も決して神格化されておられません。ですからこういう奇跡的な話は原始聖典にはほとんど出てきません。この話も早い時期に成立した聖典には出てきませんので（増一阿含經と Jātaka）、少し後世になってから作られた伝承ではなかと思います。しかしアショーカ・ピラーがありますので、釈尊の滅後 100 年か 200 年のころには、こういう伝承ができていたということになります。しかし私どもの書こうとしている釈尊伝は、原始仏教聖典に基づいた伝記でありますので、これはネグレクトせざるをえないのではないかと思います。しかし釈尊時代にサンカッサという町があったこと自体は確実でありますので、そこで場所を確認しに行ったということでございます。

なお小高い丘の上に建物が建っておりますが（写真 13）、これはヒンドゥー教のお寺です。



写真 13

小高い丘は古代の仏教のストゥーパ（仏塔）の跡です。インド平原の中でこのように小高く盛り上がっている場所があったら、それは人工的なものと考えて差し支えありません。したがって仏教遺跡を探すのはそう難しくありません。しかし現在までそのまま放置されているところはもうほとんどないと思います。農民達が丘を崩して、平らにして畑にしてしまうからです。第 2 部でも申し上げますが、お釈迦様の最後の旅に立ち寄られた場所にはかつてはストゥーパが建てられていたが、今は畑になってもうないというところがいくつもあります。

ですから仏教の遺跡の上に、ヒンドゥー教の建物を建ててけしからんなどと考えることは間違っています。ヒンドゥー教のお寺を建ててくれたから、今までに残ったわけでありますので、むしろお礼を言わなければならないと思います。

そもそもお釈迦様の行跡が残された場所は、お釈迦様が何かをなさったから、聖なる場所になったというわけではなく、もともと聖なる場所のところでお釈迦様が何かをなさったのです。菩提道場でもそうですし、初転法輪の地でもそうです。サンカッサももともとそういう聖地であったので、こういう伝承が作られたのではないかと思います。

三蔵法師の町：カンナクツジャ

カンナクツジャ（Kaṇṇakujja）は現在はカヌアジュと呼ばれているところです。サンカッサから少し南下したところです。ここもお釈迦様の時代からあった町で、お釈迦様も通られたようですが、特別の因縁は残されておられません。

むしろここは後代の三蔵法師、あの孫悟空や沙悟浄、猪八戒を連れて天竺にお経を取りに行ったという「西遊記」のモデルになった玄奘三蔵の時代に栄えた都で、戒日王、ハルシャバルダナ王が都にした所として有名です。この王には玄奘は大変に歓待されたようでありまして、それは『慈恩寺三蔵法師伝』（大正

50、247頁下～248頁上）という書物に詳しく書かれています（写真14）。

竟十八日無一人發論將散之夕。法師更稱揚大乘讚佛功德。令無量人返邪入正。棄小歸大。戒日王益增崇重。施法師金錢一萬銀錢三萬上。毘衣一百領。十八國王亦各施珍寶。法師一皆不受。王命侍臣莊嚴大象施幢。請法師乘令貴臣陪衛。巡衆告唱。表立義無屈。西國法凡論得勝如此。法師讓而不行。王曰。古來法爾事不可違。乃將法師袈裟遍唱曰。支那國法師立大乘義。破諸異見。自十八日來無敢論者。普宜知之。諸衆歡喜爲法師競立美名。大乘衆號曰摩訶耶那提婆。此云大乘天。小乘衆號曰木叉提婆。此云解脫天。燒香散花禮敬而去。自是德音彌遠矣。王行宮西

写真14

写真はその都の跡でありまして、形はほとんど留めておりませんが、所々にレンガの壁跡が残されています。ここもインドの考古局、archeological survey of India、略してASIといいますが、その保護遺跡として指定されて居りますが、発掘はほとんど手つかずです（写真15）。



写真15

裏切りの町；コーサンビー

次に私たちが訪問した所は、コーサンビーです。ここはヤムナー河とガンジス河が合流する地点であるアッラハバードという町の郊外にありまして、ヤムナー河の傍にあります。先程ヤムナー河の雨量をご紹介したときに写真を出させていただきましたのはここです。この辺りからお釈迦様の活発に活動された地域に入りますので、雨期の雨量が大変気になって、わざわざ訪れてみたわけですが、乾期とほとんど変わらないので拍子抜けしました。

この写真はウデーナ王の城跡でありまして（写真16）、



写真 16

これはゴーシタ長者が建てたゴーシタ園（写真 17）、



写真 17

これはウデーナ王の宮殿跡、あるいは僧院跡とされておりまして、ここにはアショーカピラーが建てられています（写真 18）。



写真 18

ここは裏切りの町としました。おそらく釈尊の晩年のことですが、このこのサンガが些細なことで喧嘩しまして、せっかく調停のために訪れた釈尊にこれは自分たちのことであって、お釈迦様には関係がないから帰ってくれと追い返した場所であるからです。

事ほど左様に、釈尊教団はそれぞれのサンガの自主性を認めておりました。ここでいうサンガは 10 人とか 20 人という比丘や比丘尼たちが共同生活する集団のことです。それでは現代人の私たちが考えているような全世界の出家修行者を統合するような「教団」組織というものはなかったのでしょうか。自分たちの

ことだから帰ってくれと言われて釈尊は舍衛城に帰られたわけですが、その当時の教団の中で釈尊はどういう役割を果たされていたのでしょうか。実はこういう問題意識も私たちにあるわけでありまして、私どもを進めております「釈尊伝の研究」は「釈尊教団」の研究という性格も持っております。おそらくこういう視点で、釈尊の伝記の研究をされた学者はないのではないかと思います。

そこでジャイナ教の教団にも非常に強い関心があるわけですが、これについては11月の18日にお話しさせていただく予定にしております。

インドを象徴する町；サールナート

次はサールナートです。サールナートとってすぐにお分かりになる方は少ないかもしれません。しかしベナレスの近くの初転法輪の鹿野苑といえば、どなたでもああと気がつかれると思います。しかもここはインドを象徴する町でありまして、インドのお札やコインにはここにある像が描かれているのはどなたでもご存知ではないかと思います。それはご存知のように、初転法輪を記念して建てたアショーカ王の法勅柱の上に乗っていたライオンの像からとったものです（写真19 サールナート博物館のアショーカ王の獅子の石柱の写真）。

ここでは博物館の考古学者たちにいろいろとお世話になり、また意見を交換いたしました。この写真はその時の様子です（写真20）。



写真 20

意見交換の主な主題は初転法輪の跡の釈尊の行動についてでありましたが、やはり考古学者たちですので、釈尊の伝記というような私たちの研究課題には余り詳しくありませんでした。そこで近くに住んでおられる Dr.C.S.UPASAK というナーランダーのパーリ大学の元学長さんを紹介していただきまして、博物館の館長さんと一緒にお邪魔しました（写真21）。



写真 21

UPASAKさんは“Dictionary of Early Buddhist Monastery Terms”という書物などを出されている著名な学者ですが、今は目を悪くしてほとんど目が見えないということでした。私たちの研究に大変興味を持たれまして、元気なら是非一緒に行きたいと言っておられました。しかし釈尊伝研究については、今までの学者の域を超えていないなと感じました。

またもう1人の考古学者で、カピラヴァットゥ（ピブラーワー）の発掘にも携わられ、今は雨期であるので休んでいるけれど現在発掘中という、インドの考古局売り出し中のケーサリヤ仏塔の発掘担当者であるというShri Lal Chand Singhさんにもお会いしたいということで、しきりに電話連絡を取っていただきましたが通じないので、それでは直接行ってみようということで、これには他の館員の方に同行いただいてお尋ねしました。しかしあいにく南インドに講演に出かけられているというので、会えませんでした。これがその時の記念写真です（写真22）。もちろんSinghさんは写っておりません。

次の写真（写真23）はそのついでに行った（※Aharauraの近くにある）アショーカ王の摩崖法勅の保護建物です。そこも開けて見せて下さることになっていたのですが、せっかく持って行った鍵が合わなくて、入れませんでした。



写真22



写真23

さまよえる町；アヨーディヤー

ベナレスを経由しまして、今度は北上して、次はガーグラ河のほとりにあるアヨーディヤーを訪れまし

た。ガーガラ河は古のサラブー（サンスクリット語のサラユ）河です。ここはインドでもっとも人気の高い神様であるラーマの生まれ故郷である町です。イスラムが進入したときに、このラーマの生まれた場所に建っていたヒンドゥー教のお寺を壊して、モスクを建てておりましたが、最近の保守的なヒンドゥー教運動の高まりに呼応しまして、ヒンドゥー教の原理主義者が台頭して、それを打ち壊そうということで騒動になって、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の抗争が全国に波及する発端になった、ちょうどエルサレムのような町です。町に入るときには、車の中の荷物の点検などがありまして、私たちもおっかなびっくりで町に入りました。

ところでこの町をさまよえる町というのは、いくつかの謎があるからです。ラーマの生まれ故郷なら、原始仏教聖典時代から知られているはずですが。確かに原始聖典には、アヨーディヤーという町は出てくるのですが、それはガンジス河の沿岸にあるとされています。ここにも河は流れていますが、それは現地ではサラユと呼ばれる、ガーガラ河という河でありまして、ガンジス河ではありません（写真24）。



写真 24

代わりに原始聖典にはサーケータという地名がしばしば登場して、それが今のアヨーディヤーに当たるのではないかと考えられるのですが、はっきりとサーケータが今のアヨーディヤーに当たるとする学者はありません。先程のナーランダー大学の元学長のウパサックさんも判らないと言っておられました。

インドの考古学に与えた玄奘三蔵の『大唐西域記』と、法顕三蔵の『法顕伝』の影響は、我々の想像している以上のものがあります。特に『大唐西域記』です。この2つの文献がなかったら今のインドの仏教考古学の成果はなかったといって過言ではないと思います。その『大唐西域記』にはアヨーディヤーが出てきますが、これは原始聖典がいうのと同様に、ガンジス河の沿岸にあるとされており、現在のアヨーディヤーからは、200キロほど離れている場所を指し示しています。そしてサーケータという地名は出てきません。

反対にその200年前くらいに書かれた『法顕伝』にはサーケータという地名が出てきて、それは現在のアヨーディヤーを指し示しています。しかしアヨーディヤーという地名は出てきません。

こういう具合で、現在のアヨーディヤーが原始聖典のサーケータなら、昔のアヨーディヤーは200キロも西のガンジス河の沿岸にあったのか、しかしいつの時代にアヨーディヤーは現在地に引っ越してきたのか、といったことが混とんとしておりました。

ところが現地に行ってびっくりしました。写真は私たちの泊まったホテルです（写真25）。これはUP州のtourismの直営ホテルですが、このホテルの名前はサーケータホテルとなっています。しかも鉄道のアヨーディヤー駅の真ん前に建っています。その他にもサーケータ・カレッジという大学がアヨーディヤーの町の中にありました。現地の人たちは何の疑いもなく、アヨーディヤー＝サーケータだったのです。ある学校で聞いたことでまだ確認しておりませんが（写真26）、叙事詩として有名な、ラーマ王子が主人公の「ラーマヤナ」の中にも、アヨーディヤー＝サーケータであることを示す文章があるということです。



写真 25



写真 26

Gurukul 学校 (Ayodhya) にて ; Mr. S.M.SHARMA (左)

Mr. Virendra Kumar PANDEY

それじゃ一体原始聖典のアヨーディヤーや『西域記』の記述はどう解釈すべきか、という問題は残りますが、しかし我々の作業としては、サーケーター=アヨーディヤーという結論で問題はないと確信するに至りました。百聞は一見に如かずという事とはこれだったんだと感じ入った次第です。

失われた町=カピラヴァットゥ

先程は「さまよえる町」でしたが、今度は「失われた町」です。カピラヴァットゥはお釈迦様の育った町ですが、その故地には現在2説がありまして、互いにあい争っています。要するに本家争いです。一つはインド側にあるインド考古局が押すピプラーワーで (写真 27) 、



写真 27

もう一つはネパール側にあるネパール考古局が押すテラウラコットです（写真 28）。



写真 28

左：ティラウラ=コット（『ブッダの世界』 pp.84-85, 学研）

右：『立正大学ネパール考古学調査報告第 I 冊ティラウラ コット 本文編』（p.225, 雄山閣）

こちらの方は日本の立正大学が発掘協力をいたしました。「失われた町」はこの「発掘調査報告書」が使っている言葉です。

『西域記』の記述によりますとルンピニーはカピラヴァットウの東北東 90 里（40km.）くらいに当たります。一方『法顕伝』によりますと、東 50 里（25km.）になります。『西域記』にしましても『法顕伝』にしましても、それほど厳密に計測したものではありませんから、これらが決め手にはなりません。

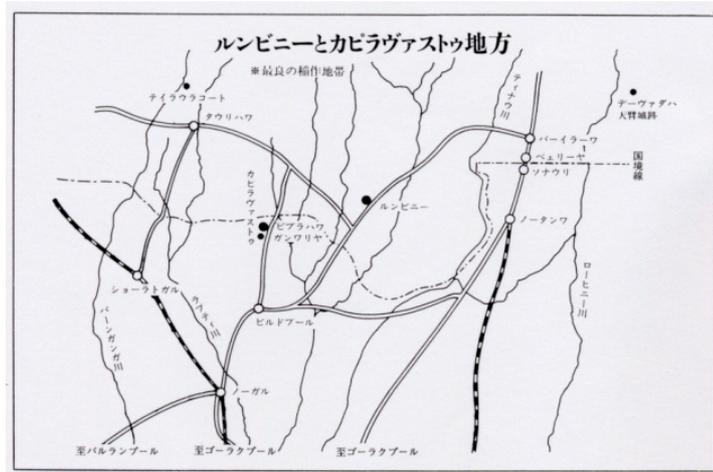
これについてブッダガヤーで案内してくれました、先程のウバサックさんのナーランダー大学の大学院で教えを受けたという、政府の観光局のガイドをしておられてもう引退された Mr.Ram Bala SINGH という方が面白いことを言うておりましたので、紹介しておきます。写真はその時の模様です（写真 29）。



写真 29

彼はインド人ですから、インド側のピプラーワーがカピラヴァットウだというのはのですが、その理由には

二つある。まず一つは「これは釈迦族の仏・世尊の舍利容器である」と記された舍利容器が発見されたこと、二つめは略地図を見ていただきたいと思いますが（地図2）、



地図2

前田行貴著『インド仏蹟巡禮』（p.176, 東方出版）

お母さんのマハー・マーヤーはカピラヴァットゥから故郷のデーヴァダハに里帰りする途中で産気づいたのだから、それならカピラヴァットゥとデーヴァダハを結んだ直線上にルンビニーがなければならない、ピプラーワはそういう位置関係にあるということでした。

なるほど聞いてみるとなかなか説得力があるのですが、実はデーヴァダハの位置を書き込んだ地図は今使わせていただいている地図以外には見つかりません。ピプラーワの発掘調査書にも、テラウラコットの発掘調査書にもありません。これは前田行貴という方が書いた『仏蹟巡礼』という本（青菁社）からお借りたものでありまして、インド仏蹟案内としてはもっとも信頼できる本だと思いますが、この本はインドでもなかなか人気がありまして、シンさんもこれを使っているのではないかと思います。

ですからシン説を受け入れるには、デーヴァダハの位置を確認する必要があります。また舍利容器につきましては、立正大学の調査報告書では、あっちは僧院遺跡で、こっちは城塞遺跡だ、だから城塞としてのカピラヴァットゥはこちらだと言っております。

ということでカピラヴァットゥはまだ失われたままと言ってよいと思います。

ババジーの町；クシナーラー

クシナーラーへは行かれた方も多いと思います。お釈迦さまが亡くなった土地です。あの大きな金色の涅槃像のある涅槃寺に朝6時に行きますと、黄色い衣を付けたお坊さんたちがお勤めをしています。この中心人物がここにいうババジーです。ババジーは正確には Bhavant Jee でありまして、尊者さんということでしょうか。町の人たちは親しみを込めてこう呼んでいます。この写真がその方です（写真30）。

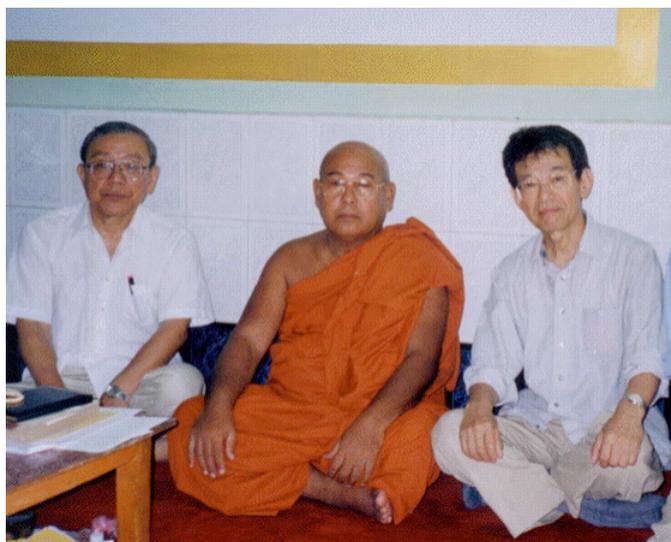


写真 30

本名はGYANESHWARとおっしゃいます。もともとはビルマ人です。

この涅槃寺は 1927 年にビルマ人によって建立されたそうでありまして、この地続きの左隣に新しいビルマ寺が建てられています。この一帯はこの方の管理下にあるようです。この写真をご覧ください（写真 31）。



写真 31

これは私がちょうど 30 年前の 1971 年に、この涅槃寺に行って撮った写真です。写真 32 は今の写真です。新しい涅槃寺の後ろにあるのは阿難塔ですが、先ほどの塔とは全く形が違います（●前田行貴著『インド仏蹟巡禮』（p.12, 東方出版））。

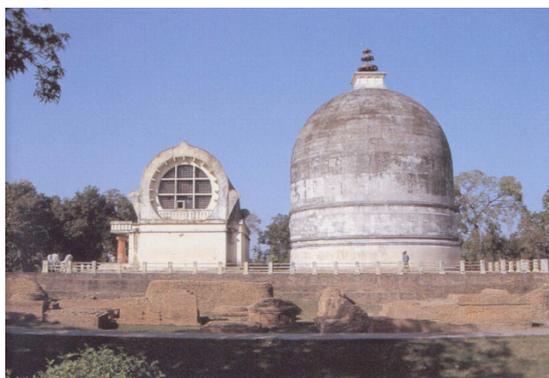


写真 32

多分ビルマ寺の方たちが修復したのだと思います。あの大きな涅槃像も金びかで、金属製のような感じを

受けませんが、これもビルマのお坊さんが色を塗ったものです。実は石製の仏像で5世紀くらいのグプタ仏とされています。

このようにお釈迦様の涅槃の地で、お釈迦様にじかに繋がるように思われるクシナーラーが、実際はババジーさんによってモディファイされているということで、この町でのババジーさんの影響力は大変なものといっただいでしょう。ババジーの町という表題を付けた所以です。

ところでわれわれがババジーさんにお会いしたのは、別の目的がありました。ここはまだUP州ですが、これから少し東に行った先はビハール州のシワン県に入ります。釈尊の最後の旅のルートと直接関係するところですが、実はこの辺りの情報が全くありません。そこでババジーに情報をもらうとともに、信頼できる人を紹介してもらおうと思ったわけでございます。ババジーさんのことは2年前の現地の新聞に、シワン県の仏教事情に詳しいと出ていたからです。ババジーさんの返事は、「信頼できる人はいない。インド人は金もうけばかり考えているので信頼できない。私の方からジープを出すから一緒に行こう。ただし今は雨期で時期が悪いから、来年の1月にいらっしゃい。ホテルは高いから自分のところに寝泊まりすればよい」ということでありました。

有り難いお申し出ではありますが、私にはその体力はありませんから、できたら若い人に行ってもらいたいと思っています。また後でも申し上げますが、インド考古局は「シワン県では今までも仏教遺跡は発見されなかったし、これからも発見される可能性はない」と断言しています。しかし地元の新聞には遺跡があるのに、考古局がつかないのに嘆願している、といった記事が出ています。ババジーも釈尊あるいはアショーカ王時代の道路が発見された、今は雨期で埋め直した、ということをおられました。この地域はマガダとヴァッジとコーサラとカーシという釈尊が活動した国々に囲まれた真ん中の地域であるにもかかわらず、そういう意味では暗黒のままに残されています。調査する価値はあるのではないかと思います。

ということでこの後、我々はシワンを調査し、ヴェーサーリー、パータリプッタを調査しましたが、これにつきましては、釈尊最後の旅に関連しますので、第2部に譲りたいと思います。

ジャイナ教の町；パーヴァープリ

その後パーヴァープリにまいりました（写真33）。有名なナーランダー遺跡の近くにあります。



写真 33

ここはジャイナ教の開祖であるマハーヴィーラが亡くなった場所です。おそらく仏教学者のほとんどは、マハーヴィーラが亡くなったのは、クシナーラーの傍のパーヴァーだと思っているのではないかと思います。しかしそれは間違いです。

確かに原始仏教聖典自身が思い違いをしている部分もあるのですが、詳しく調べてみると、それが間違

いであることが判ります。ここでもジャイナ教の教団について調査いたしました。

山の町；王舎城

王舎城は釈尊が活動された地域の中では唯一の山岳のある地形の地域です。それでも王舎城の五山の中では1番高い山が Chatha hill でありまして、1747ft.でありますから 611 メーターです。おそらくお釈迦様はこれ以上に高いところに上られたことはないと思います。写真は靈鷲山です（写真 34）。



写真 34 山頂の香室址（『ブッダの世界』p.113, 学研）

皆さんはお釈迦様が生まれられたルンビニーやカピラヴァットゥがネパール国にあるから高いところという印象をもたれているかもしれませんが。確かに遠く北の方にヒマラヤ山脈が遠望できますが、ルンビニーやカピラヴァットゥ自体はせいぜい海拔 120 メートルくらいの所なのです。それはルンビニーやピプラーワーの写真を見ていただければ判ります（写真 34）。サールナートやヴェーサーリーの景色と全く変わりません。



ルンビニー（1971 年撮影；森）
写真 34



Piprahwa からネパールを望む

地図を見ると判りますが、デリーやマトゥラー、アグラなどのヤムナー河の岸边にある町は、南の方のデカン高原の高台がせり出しているところにあります。ですからちょっと高いところですが。しかし先ほど申し上げましたが、お釈迦さまはヤムナー河を越えられたかどうかわかりません。

またコーサンビーや、ベナレスからガンジス河を渡って南の方に50キロほど行くと、山並みが見えます。これはデカン高原の北端にあるヴィンディヤ山脈の山並みです。しかしお釈迦さまはここまでは足を伸ばされませんでした。ともかくお釈迦様の活動された地域はヒンドゥスタン平原が中心で、真っ平らな地域でした。唯一の例外が王舎城辺りだということです。王舎城の五山はヒマラヤ山脈とデカン高原に挟まれたヒンドゥスタン平野に浮かぶ小島であるわけで、唯一の高い場所ということになります。

お釈迦様の活動範囲を現在の行政区画で言いますと、UP（ウッタルプラデーシュ）州の南西と、ビハール州の北東に限られます。今年からインドではこの行政区画が変わりまして、今まで25の州であったものが28になりました。3つ増えたわけですが、その内の一つはUP州の北西部がUttaranchal州として分かれ、ビハール州の南東部はJarkhand州として独立しました。それぞれ分かれた部分はお釈迦様の活動範囲でなかったところですから、釈尊の活動範囲はそのまま、新しいUP州と新しいビハール州と重なることとなります。この地域は全く平べったいお盆の底のような地形で、雨が降ると水に浸かる地域ということになります。お釈迦様の一生は、ですから水に大変影響されたことと思います。またお釈迦様の行動範囲はそれほど大きなものではなかったことも分かります。

砂の町；ボドガヤー

ボドガヤーは今の呼び名で、仏典にはボドガヤーという地名は出てきません。原始聖典ではかなり大きな地域を指すウルヴェーラーと呼ばれる場所の一部でした。‘uru’は「広大な」、velāは「砂地」を意味しますので、「広大な砂地の場所」という意味です。現在のボドガヤーは砂地という感じはしませんが、尼蓮禪河を渡った現在スジャーター村と呼ばれているところは写真のように（写真35）、



写真 35



砂漠のような白い砂地の土地です。他の仏蹟はまさしくヒンドゥスタン平原のただ中にありますから、雨が降ると泥沼になり、乾くと細かな土塵が舞い上がるという風土ですが、ここは王舎城よりも南にあって、デカン高原により近いところですから、砂の摩滅の程度が低いということでしょう。

釈尊はこのあたり一帯で6年間の修業をされたわけでありまして、俗に言われている「前正覚山」が修業の場所ではありません。写真35の左側はNeranjara河とMahani河に挟まれたスジャーター村から「前正覚山」の方面を見たもので、多分写真の左側の山が「前正覚山」の裏側に当たります。我々は普通尼蓮禪河の方から尼蓮禪河を挟んでこの山を見るわけですが、これはその裏側になるわけです。そして次の写真（写真36）が前正覚山です。



写真 36

Prag Bodhigiri (前正覚山)

一般にはお釈迦様はこの「前正覚山」で修業されたとされていますが、これは『西域記』などの伝承が、誤り伝えられてこういう俗説ができ上がったものです。またこの伝承自身も原始聖典時代の伝承ではなくて、もっと後の伝承です。

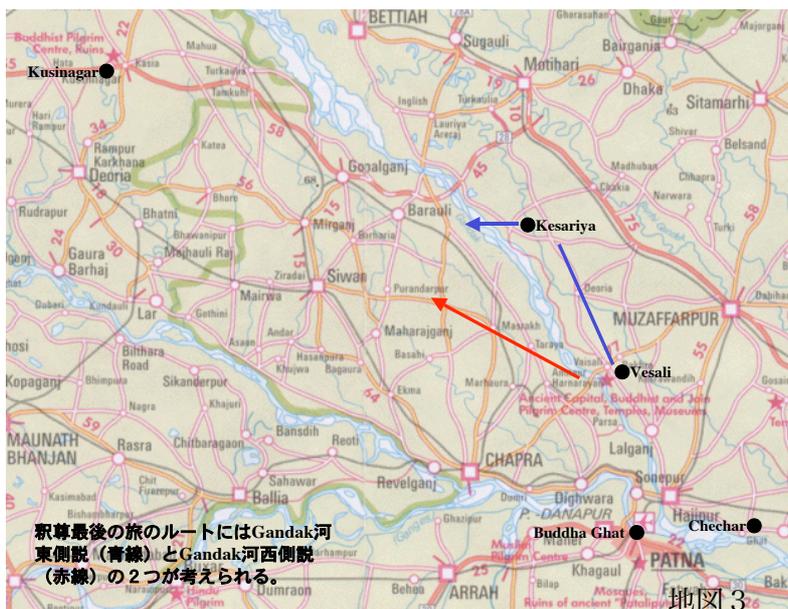
修行時代の釈尊のこともお話したいのですが、時間がございませんので、これで第1部は終了させていただきます。ご質問がございますでしょうか、最後に時間を設けさせていただきます。

第2部 お釈迦様はどの道を通ってクシナーラーに着かれたか

『涅槃経』の記述

それでは第2部の「お釈迦様はどの道を通ってクシナーラーに着かれたか」に入らせていただきます。今まで釈尊最後の旅のルートと言ってまいりました、そのルートについてでございます。

ご存知のようにお釈迦様の最後の様子は「涅槃経」というお経に書かれています。この涅槃経には現在パーリ語で書かれた“Mahāparinibbāna-suttanta”とサンスクリット語で書かれた“Mahāpariṇirvāna-sūtra”の外に、漢訳の後秦・仏陀耶舎共竺仏念訳「長阿含経」中の『遊行経』、西晋・白法祖訳『仏般泥洹経』2巻、失訳『般泥洹経』2巻、東晋・法顕訳『大般涅槃経』3巻の6本が残されています。もちろん皆、お釈迦様のお亡くなりになったときの様子を描いたものですが、その様子は長阿含経が『遊行経』としておりますように、お釈迦様が王舎城の靈鷲山を出発されまして、ガンジス河を渡って、ヴェーサーリーに入り、そこで雨安居をされて、雨安居を明けてから3ヶ月後に入滅するぞと宣言されて、ヴェーサーリーを出発されてクシナーラーまで旅をされて、そこで亡くなるまでの遊行の様子が主題になっているわけでございます。そこでここではその最後の旅のコースを調べてみようということでございます。



釈尊最後の旅のルートにはGandak河東側脱(青線)とGandak河西側脱(赤線)の2つが考えられる。

地図 3

もちろん涅槃経には地名が記されています。しかし先程「涅槃経」には6本あると申し上げましたが、

それぞれに微妙に食い違いがあるうえに、そこに記されている地名が現在のどこに当たるかという大変厄介な問題が残されているわけでございます。

主な問題はヴェーサーリーからクシナーラーへの道順ですので、今考えられている2つのルートを図にしてみました（地図3）。一つはガンダック河の東側にあるヴェーサーリーを出ましてそのまま北上して Kesariya というところでガンダック河を西に渡るといふガンダック東側説です。もう一つはヴェーサーリーからすぐにガンダック河を渡りまして、ガンダックの西側を北上するといふガンダック西側説です。この西側がビハール州のシワン県になりまして、実は私たちはこのコースだったのではないかと考えています。

ケーサリヤの仏塔

しかし残念ながらインドの考古学者たちは、この私たちの説に真っ向から反対します。その理由は現在インド考古局が発掘を進めている、インドで最大の、ポロブドゥールの仏塔にも匹敵するという規模のケーサリヤの仏塔が、釈尊とヴェーサーリーの町の人々との別れの場所だと信じているからです。これはガンダック河の東側に位置します。これがそのケーサリヤの仏塔です（写真37）。先ほどお会いしたいと思ってお尋ねしたら留守で会えなかったという Shri Lal Chand Singh さんが発掘の担当であると申し上げた遺跡です。



写真 37

確かに大きな仏塔でありまして、まだ写真の右半分には土がかぶっています。発掘が済んでいない部分です。しかしポロブドゥールに匹敵するというのは大袈裟でして、ポロブドゥールとは規模も質も雲泥の差があります。ポロブドゥールもそれほど古い遺跡ではありませんが、この遺跡もそれほど古くはなく、古くてもせいぜい6世紀ではないかと思えます。パトナ博物館の方もそう言うておりました。インド考古局はここを大々的に売り出そうとしているようですが、それはちょっと無理のような感じがいたします。大きくとも質が伴わないからです。この写真からもお分かりいただけると思いますが、仏像も何体か残されていますが、泥でできた塑像で、余りできのよいものではありません。それに発掘されるはなから修復しているようでありまして、日本の考古学では考えられないことです。

ともかくここが『西域記』が「ヴェーサーリーの大城から西北へ5,60里（約25km）行ったところに大stūpaがある。リッチャビ子が如来の後を追ってきたので、大河を化現されて、渡ってこれないようにされた。如来は形見として鉢を残した」というその場所であるとするわけですから（『大唐西域記2』379頁、平凡社）。Kesariyaはヴェーサーリーからは50km程は離れており、この記述と距離はあいませんが方角は一致します。

似たような記事は『法顕伝』にもありまして、「クシナガラから東南に行くこと12由旬に、リッチャビ族が釈尊の後を追おうとしたので、化して深い大きな堀を造って渡れないようにした。そして仏は形見と

して仏鉢を与え、彼らを家に帰らせた。そこには石柱が立てられ、銘題がある」とされており（『法顯傳』88頁、平凡社）。しかしここはヴァイシャーリーを起点にして見ると西に5由旬（約60km）のところに当たるとしてありますから、ガンダック河の西側に当たりまして、場所はケーサリヤとは一致しません。

しかしインド考古局の人たちは、会う人会う人全てがここが釈尊とヴェーサーリーの人たちと分かれたところで、だから仏塔は鉢を伏せた形をしているんだと主張するわけです。これはサーンチーの有名な仏塔ですが（写真38 サーンチーの仏塔（『ブッダの世界』p.247, 学研））、



写真38

そもそもインドの仏塔は全てがこのように鉢を伏せたような形をしているのでありまして、だからお釈迦様と別れたところだというのなら、インドの仏塔は全てその場所になってしまいかねません。考古学者ともあろう方がそういうことを言ってよいのかと何度も口に出かかりましたが、我慢しておりました。

なおついでに申し上げておかなければなりません、このような伝承を伝えるのは、『法顯傳』や『西域記』でありまして、先程ご紹介しましたいくつかの涅槃経にはありません。ですからたといこの伝承の場所がケーサリヤをさすとしても、それを原始聖典以来の伝承として信じることはできません。ただ一つ例外は、法顯訳の『涅槃経』です。『法顯傳』を書いた人物とこの経を翻訳した人物は同一人なので、一致するのは当然です。しかし法顯はこの場所をヴェーサーリーの西と考えているわけですし、実は「涅槃経」には釈尊がヴェーサーリーを出るときに、ヴェーサーリーを振り返って、これがヴェーサーリーの最後の眺めだと慨嘆される有名なシーンがあるのですが、法顯訳の「涅槃経」はそのシーンと同じ場所としています（写真39 法顯訳『大般涅槃経』（大正1、193頁中））。

已。即便還歸重閣講堂。食訖澡漱與諸比丘。往乾茶村。路經毘耶離城。世尊迴顧。向城而笑。阿難即便頭頂禮足。而問佛言。無上大尊。非無因緣而妄笑也。佛即答言。阿難。我今所以向城笑者。正爲最後見此城故。當於如來說此言時。虛空之中。無雲而雨。於是阿難復白佛言。世尊。甚爲奇特。虛空清淨。無有氣翳。忽然而降如此密雨。佛告阿難。汝知之不。虛空諸天。聞我說言。最後見於毘耶離城。心大懷*懷。悲感涕泣。此是天淚。非爲雨也。爾時阿難及諸比丘。聞佛此語。心復悲*懷。悶絕躡地。而白佛言。今者天人。極大苦痛。世尊云何而欲委捨般涅槃耶。爾時如來。卽以梵音。而安慰之。汝等不應生於憂苦。諸比丘言。世尊。今者最後見於毘耶離城。不久便當入般涅槃。我等云何而不憂

写真39

それはそうでしょう、もしヴェーサーリーの人たちが送ってきたとするなら、彼らと別れる場面と、振り返ってこれがヴェーサーリーの最後の眺めだと嘆息される場面とが別であるはずはないわけです。

この嘆息されるシーンは『西域記』にも書かれていますが、それはケーサリヤとは別の場所になっておりますので、辻褄が合いません。したがってケーサリヤの話は信じられるようなものではないということになります。

おそらく考古局の人たちがガンダック河東側説を取るのには、これが唯一の根拠だと思います。しかしそれは余り信用すべきようなものではないことをお分かりいただけたと思います。

そこで次に私のガンダック西側説の根拠をお話させていただきます。

アンバ園

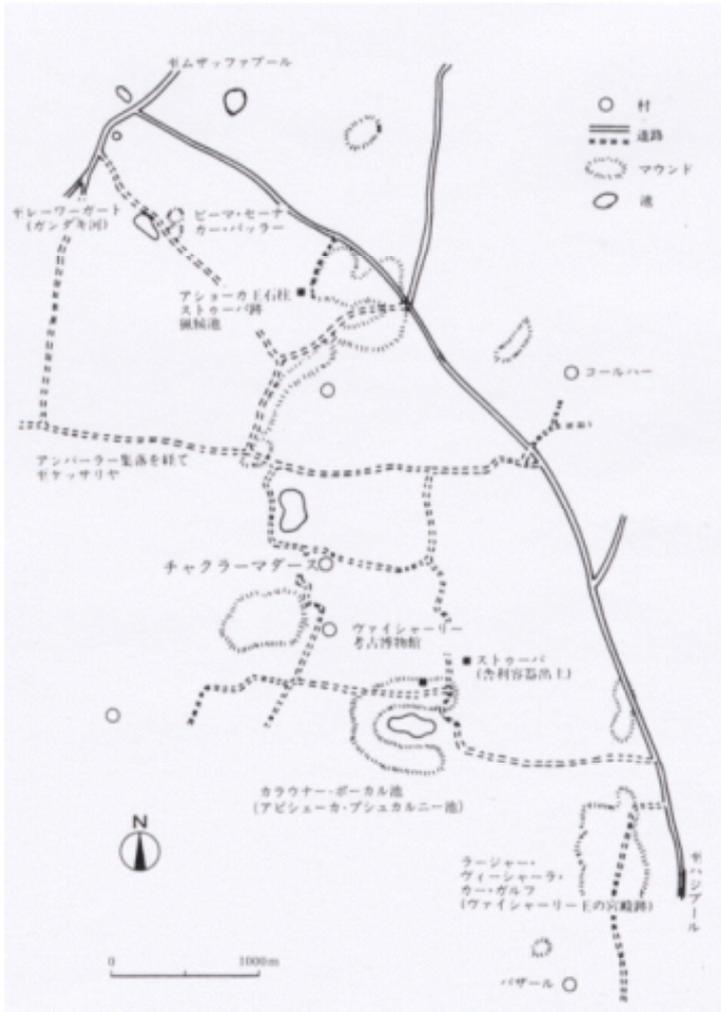
まず手がかりとしてアンバパーリという遊女から寄進されたとされているアンバ園から考えてみたいと思います。「涅槃経」では諸本全てが、釈尊は王舎城を出てパータリ村を經由してガンジス河を渡られてから、Kotigāma という村と Nādikā 族の村を経て、ヴェーサーリーに至られる途中で ‘Amabapālivana’ に滞在されたことになっています。『法顕伝』はここを「城の南3里」としますが、原始聖典の一つである増一阿含経 019-011 (大正02 p.596上) は「菴婆婆利園 (ambapālivana) が毘舍離の北にあった」としています。『西域記』も城の西北5,6里のところにある伽藍の北3,4里のところ stūpa があって、そこはヴェーサーリーの人々が釈尊を見送ったところで、その西北の遠からざるところに釈尊がヴェーサーリーをよくよく見られたところ、そしてその南の遠からざるところにアンバパーリー園の址がある、としています (pp.231~2)。だからこれでは城の西北になるわけです。現地では現在 ‘Amabapālivana’ 址は Ambara と呼ばれている地点に比定されており、そこには「Ambara 小学校」が建てられております (写真40)。



写真40

地図でいうとヴェーサーリーの都城の西北に当たります (地図4 ヴェーサーリーとその周辺地図)。

そうするとお釈迦様はガンジス河を渡ってから、どのような経路でアンバ園に到着されたのでしょうか。ガンジス河はヴェーサーリーの南方にあり、アンバ園は町の西北にあるのですから、普通ならヴェーサーリーの町中を通してアンバ園に行かれるはずですが、しかしそれなら町の人々に知られるはずであるのに、町の人々はお釈迦様が来られたことを知りませんでした。そこで彼らよりも、遊女のアンバパーリーが先に食事を招待する権利を取ってしまったために、地団駄踏んで悔しがったのです。ですからお釈迦様はヴェーサーリーの町を通らずに、アンバ園に行かれたこととなります。



地図4 ヴェーサーリーとその周辺地図



写真 41

Nādikā 族の村

そこでアンバ園に来られる前にお釈迦様はどこに寄られたかが問題となります。涅槃経では Nādikā 族の村としています。Nādikā あるいは Nādikā はサンスクリット語では Jñātrika でありまして、これはジャイナ教のマハーヴィーラが生まれた町 Kuṇḍagrāma の別名です (写真 41)。インドの有名な叙事詩 Rāmāyana によれば、ヴェーサーリーは 'Vaisali' と 'Kuṇḍagrāma' と 'Vaniyagrāma' の三つから構成されていたということでありまして、この 'Kuṇḍagrāma' はヴェーサーリーの北にあったようです。したがってガンジス河は南にあるのに、釈尊は不思議なことにわざわざ遠回りして北の方から、南下されてアンバ村に来られ、そこからさらに南の方のヴェーサーリーに入られたこととなります。

Koṭigāma

さてそれでは Nādikā 族の村へはどこから来られたのでしょうか。それはパーリ語では Koṭigāma ということになっています。「遊行経」では拘利村としています。しかし残念ながらこの村がどこにあったのかは皆目検討が付きません。しかし一つの手がかりがあります。次の表をご覧ください。それは白法祖訳の『仏般泥洹経』と、失訳の『般泥洹経』がヴェーサーリーからクシナガラに行くときにも、ここを通過しているということです。Skt.本は来るときは Kuṭigrāma で、行くときは Kuṣṭhagrāma としておりますから、同じ言葉ではありませんが、ひょっとすると白法祖訳の『仏般泥洹経』と、失訳の『般泥洹経』と同じ伝承だったのかもしれない。

順番	P 本	Skt 本	遊行経	白法祖	失 訳	法 顕
1	Gotama tittha	Gautamatirtha	瞿曇津	仏溪	瞿曇津	—
2	Koṭigāma	Kuṭigrāma	拘利村	拘隣聚村	拘利邑	—
3	Nādikā	Nādikā	那陀村	喜予国（聚）	喜予邑	—
4	Ambapāli vana	Āmrāpālivana	菴婆婆梨園	奈*園	奈園	—
5	Beluva-gāmaka	Veṇugrāma	竹林叢	竹芳聚	竹芳邑	—
6	Cāpāla cetiya	Cāpāla caitya	遮婆羅塔	一樹下	急疾神地	遮波羅支提
7	大林重閣講堂	Cāpāla caitya	香塔	—	講堂	大林重閣講堂
8	Vesāli の眺め	Vaiśali の眺め	—	維耶離の眺め	維耶国の眺め	毘耶離の眺め
9	—	Kuṣṭhagrāma	—	拘隣聚	拘利邑	—
10	Bhaṇḍagāma	Gaṇḍagrāmaka	撻荼村	撻梨聚	健持邑	乾荼村
11	Hatthigāma	Hastigrāmaka		授手聚	授手邑	象村
12	Ambagāma	Āmrāgrāmaka	菴婆羅村	掩滿聚	掩滿邑	菴婆羅村
13	Jambugāma	Jambuagrāmaka	瞻婆村	金聚 (1)	金邑	閻浮村
14	Bhoganagara	Bhoganagaraka	負弥城	夫延城	夫延邑	善伽城
15	Pāvā	Pāpāgrāmaka	波婆城	波旬国	波旬国	波波城
16		Droṇagrāmaka				
17		Śūrpagrāmaka				
18			婆梨婆村			
19				喜予聚	善淨邑	
20				華氏聚	華氏邑	
21						鳩娑（婆）村

もしそうだとすると、王舎城からヴェーサーリーに来るときにも、ヴェーサーリーからクシナーラーへ行くときにも通って、しかもヴェーサーリーの北にあった Nādikā 族の村と西北にあったアンバ園を通るとするならば、Koṭigāma はヴェーサーリーから西北の方角にあったに相違ありません。ケーサリヤ説を取ると、北の方角であったことにはなりますが、それではガンジス河から離れすぎて、王舎城から来るときにここを経由したということは考えられませんし、東の方角ではクシナーラーの反対の方角になります。

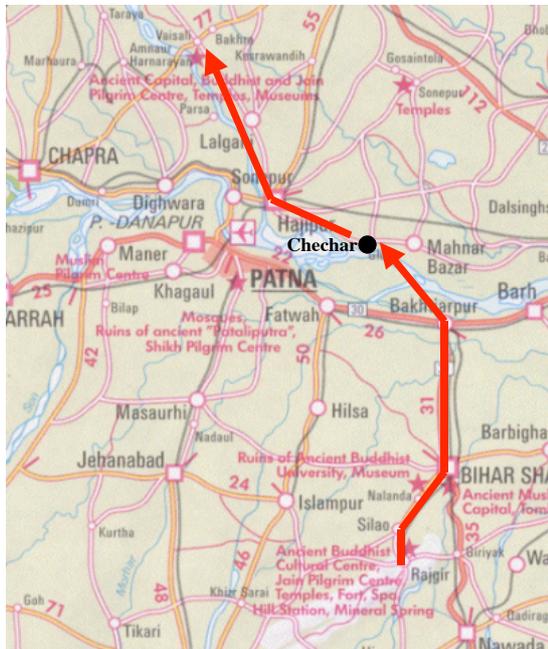
涅槃経の出発点

それは次のことから推測されます。「涅槃経」の出発点は王舎城の靈鷲山です。そのとき王舎城の王様の阿闍世王はガンジス河の対岸のヴェーサーリーを首都とするヴァッジ族の国を攻めようとしておりました。そこで王はヴァッサカーラという大臣を送って、この作戦は成功するであろうかと尋ねさせました。お釈迦様はヴァッジ族の人々が仲むつまじく、民主的に合議の上で事を決めていたら、それは成功しないとお答えになりました。それは王舎城で雨安居をされていたときのことだと思います。

そして雨安居を終えて釈尊はヴェーサーリーに向けて王舎城を出発しました。次の雨安居はヴェーサーリーでお過ごし下さいという要請があって、すでに約束がなされていたものと思います。

その当時の普通の王舎城とヴェーサーリーを結ぶルートは地図のように（地図5）、王舎城からまっす

ぐ北上して今の Bakhtiyapur に至り、そこでガンジスを渡って対岸の Chechar に至り、そこから西北方にあったヴェーサーリーに向かう道路があったものと考えられます。このことは乾期の調査報告会の際にも申し上げました。今の Chechar は寒村にすぎませんが、ここにはガンジス河に沿って3キロにもおよぶパーラ王朝時代の遺跡が発見されておりまして、おそらく釈尊時代にも村があったものと考えられます。これが Chechar の遺跡です。といって表面は畑になっておりまして、見た目には遺跡があるかどうか分かりません（写真41）。



地図5



写真41

Chechar の遺跡；

Dr.B.P.PANDEY 氏と 1999.11

しかし釈尊はこの時にはこのコースは通られませんでした。なぜかと言いますと、その当時のパータリ村、後のアショーカ王の都パータリプトラ、今のパトナの町に阿闍世王がヴェアッジ族との戦争のために城を築いている最中で、その様子を見に立ち寄られたからです。出発前に、不穏な空気があったわけですから、心配されたのではないのでしょうか。しかし幸いにその心配はないということで、安心してガンジス河を渡られました。

増水のガンジス河

その時ガンジス河は増水しておりまして、渡し場のところまで水が来ていて、鳥でも水が飲めるほどであったといひます。これは私の推測では今の2月頃のことではないかと思ひます。もしそうだとすると乾期の真っ最中で、本来は1番水の少ないときです。ですからこの年には異常に雨が降ったということになります。この後お釈迦様はヴェーサーリーに行かれましたが、そのときヴェーサーリーは飢饉でありまして、お釈迦様達も町で食事を得ることに苦勞されました。そこで弟子たちも知人友人を頼って、各所に分散して雨安居を過ごすことになりました。おそらく時ならぬ季節の大雨で冬小麦の収穫に被害が出て、その後の雨期の季節には備蓄が底を突いてしまったのではないかと思ひます。まだ米の収穫には間があるからです。

このとき釈尊はどこでガンジス河を渡られたかということですが、それは現在のブッダ・ガートのところではないかと思ひます（写真42）。釈尊の渡られた渡しはそれを記念して、ゴータマの渡しと名づけられました。このブッダガートはそれと関係があるのかどうか分かりません。現在パトナの国立博物館の前の通りはブッダマルガ、すなわち仏陀通りと名づけられています。その突き当たりがブッダ・ガートに

なります。

パトナ博物館の方に伺いますと、今ガンジス河にかかっている橋を「マハトマガンジーセートゥ（橋）」というように、何かを記念してブッダ・マールガという名前を付けたのであろうということでした。それは何かを記念してつけたに違いないのですが、それなりの因縁があったはずで、それを調べなければならぬと思っています。ちなみにそのガートのパンディットに伺ってみますと（写真42の右）、



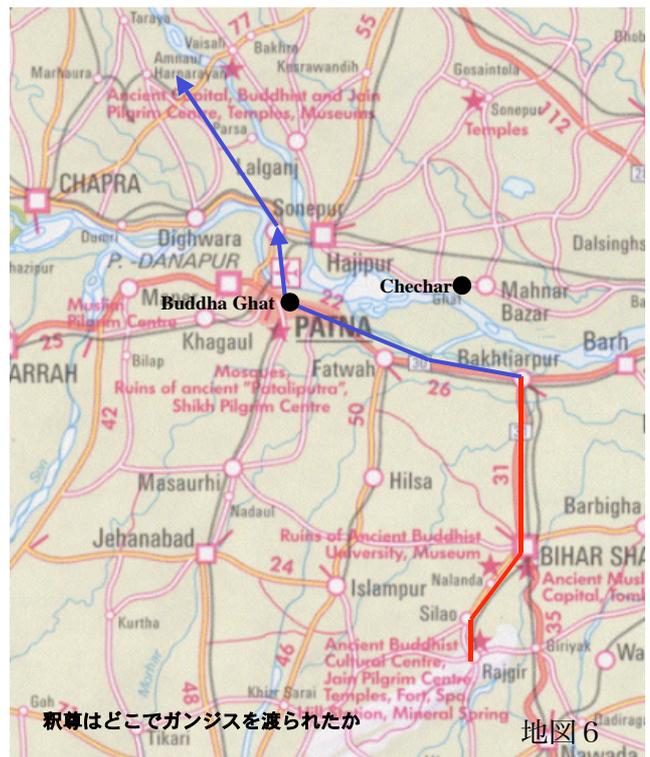
写真42

「お釈迦様が出家をされてポドガヤに行かれるときにここを通られたからだ」という答えでした。

しかしそれは蓋然性のない話ではありません。ガンジス河はここから少し川下のところで、ガンダック河と合流しています（地図6）。その辺りがガンジス河のもっとも川幅が広く、水深も深いところなのです。古代のパータリプトラ跡は、その合流地点のところにあります。おそらくガンダック河の流れに乗って攻めてくるヴァッジ族の船を防ごうとして作られた砦なのではないかと思えます。しかし流れにしたがって下るのは簡単などころは、流れに逆らって遡るには大変だということです。しかもその時には増水していたわけですから、合流地点の川下ではガンジス河は渡れなかったでしょう。そこで釈尊は古代のパータリプトラ跡よりも河を遡ったところ、今のパトナの中心のところ、すなわちブッダ・ガートのところでガンジス河を渡られたのです。渡った先はガンダック河の西側で、今のハジプールという町の西半分のところになります。

その時はおそらくガンダック河も増水していたでしょう。今でもガンダック河は、水源のヒマラヤから直接南下する形で流れる、河の長さの比較的短い河ですから、かなり流れの速い河です。前回の乾期の調査との時には、河の流れの速さも調査して回りましたが、他の河はそれぞれ時速1キロとか2キロというように非常にゆったりと流れておりましたが、この河は時速5キロほどでありました。大体人間の速足程度の早さです。しかしこのときは増水しているのですから、もっと早かったに違いありません。このような河ですから、洪水も起きやすいわけでありまして、今年のように雨が降らなくとも洪水になるわけです。

ゆったり流れているガンジス河でも、雨期の時にはあのベナレスのガートでの船による見学はできなく



なります。ましていはんをやでありまして、釈尊はガンジス河と合流している地点ではガンダックを渡ることができなくて、そのまま北上されて、ヴェーサーリーよりもかなり北に行った、より川幅の狭くなったところで渡られたのではないかと思います。ですからヴェーサーリーには南下する結果になったのではないかと考えるのです。

あるいはNādikaはジャイナ教の強い土地でしたから、そこに布教されるという目的があって、初めから予定のコースに入っていたのかもしれませんが。

Koṭigāma の位置

以上のようにお釈迦様はガンダックと合流する地点の西側でガンジス河を渡られ、そのまま北上されて、ある地点でガンダック河を渡られました。その地点はどこだったのでしょうか。それは往きにも帰りにも通られた Koṭigāma しかありません。残念ながらそれがどの地点かを特定することができませんが、しかしガンダックの西側で、緯度で言えば、ヴェーサーリーよりも北に当たるということはできるでしょう。もし南ならヴェーサーリーの町中を通ることになってしまうからです。

そしてもしお釈迦様がクシナーラーに往かれるときにも、ここを通られたとするなら、すくなくともケーサリヤまで行く前に、ガンダック河を渡らなければなりません。ここに私たちがガンダック西側説を取る一つの理由があります。

とっておきの根拠

しかしこれだけではちょっと心もとないという感じをお持ちではないかと思います。そこでいよいよ、お釈迦様はヴェーサーリーを出られるとすぐに、ガンダックを渡られて、ガンダックの西側に出られ、この西側をクシナガラに向けて進まれたというとっておきの証拠をお目にかけたいと思います。

岩波文庫に収められている中村元先生のパーリ語の涅槃経の翻訳では、お釈迦様がヴェーサーリーに別れを告げられるシーンは、

そこで（3ヶ月後に命を捨てられる決心をされて）尊師は朝早く、內衣をつけ、衣と鉢とを携えて、ヴェーサーリー市において托鉢をして、托鉢から帰って来て、食事を終えて、象が眺めるように（身を翻して）ヴェーサーリー市を眺めて若き人アーナンダに言った、

『アーナンダよ、これは修業完成者がヴェーサーリーを見る最後の眺めとなるであろう。さあ、アーナンダよ、バンダ村に行こう』と。

そこで尊師は、多くの修行者の集いとともに、バンダ村におもむいた。」

と書かれています（中村元訳『ブッダ最後の旅』（99頁、岩波文庫））。

まずケーサリヤのように50キロも離れていますと、ヴェーサーリーは見えません。ヴェーサーリーが山の上にもあれば別ですが、何しろまっ平らな地形ですから、それは無理な話です。しかもこれはヴェーサーリーの町で托鉢して、帰ってから食事をしたその時のことですから、町から50キロも離れているはずはありません。さらに『法顕伝』も『西域記』も別れの記念に鉢を渡して、なおもヴェーサーリーの人たちが後を追ってくるので、大河を化作して後を追ってこれないようにしたとしておりますが、少なくとも現在のケーサリヤの近辺には大河はありません。

‘Amabapālivana’の場所を紹介したときに述べましたように、『西域記』も『法顕伝』も釈尊がヴェーサーリーの町を振り返られたのは‘Amabapālivana’の近くで、大城から何十キロも離れた場所ではありません。しかも法顕自身の訳にかかる「涅槃経」では、釈尊がヴェーサーリーの町を振り返られたそのシーンは大河を化作されたそのシーンと別ではありません。したがって『法顕伝』や『西域記』の大河を化作したという伝承は、そもそもヴェーサーリーに別れを惜しんだ場所から連想して作られた伝承に違いありません。

このように城を振り返るシーンと大河を化作したというシーンを重ねてみると、この可能性のある地点はただ1点です。すなわちヴェーサーリーの町の西北にある現在の Ambara 小学校のところを西に3,4kmほど行って、ガンダック河の Reva-ghaṭ の脇にかけられた橋を渡った地点です。この橋を渡ったところで、ヴェーサーリーの方を振り返ってみますと、現在はガンダックの大河の向こうの木々の上に日本山妙法寺の白いストゥーパがきらきらと光って見えます。これがその写真です（写真43）。



写真43

ヴェーサーリーの大林に建てられていた ‘kūṭāgārasālā’ は「重閣講堂」と訳されています。‘kūṭā’ は山の頂のことで、霊鷲山は ‘Gijjha-kūṭā’ といいますがその ‘kūṭā’ です。‘agāra’ は「家」という意味で、‘sālā’ は「会堂」とか「講堂」と訳され、大規模な尖塔を有する建造物を意味します。根本有部律はそれは六七重の建物であったとしています（「泥薩祇波逸底迦019」（大正23 p.743中）では、「リッチャヴィー族の人々は、比丘らの居を見て、自分たちと同じ高さ六七重の房舎を造ったが、時経て壊れてきた」としている）。要するに ‘kūṭāgārasālā’ は尖塔を持った大きな建物で、今の大きな日本山妙法寺の白いストゥーパが木々の上にそびえるように、まさしく重閣講堂は木々の上にそびえて、釈尊の感慨をそそったに違いありません。まさしく釈尊がヴェーサーリーを振り返って、これが最後のヴェーサーリーの眺めだと感慨にふけられたのは、ここしかないという確信を得ることができます。

しかも目の前には、ガンダックの流れが人々の往来を拒んでいます。『西域記』や『法顕伝』のような伝承が作られるのにぴったりの場所です。

ですからガンダックの渡し場の前でお釈迦様はヴェーサーリーの人々との別れを惜しみ、船でガンダックを渡られてから岸辺に立って、ガンダックの向こうの木々の上にきらきらと輝いて見える重閣講堂を眺めて、これが最後のヴェーサーリーの眺めだという感慨を阿難に漏らされたに違いありません。向こう岸ではいつまでもヴェーサーリーの人たちが別れを惜しんで手を振っていたことでしょう。

以上のような理由から、私たちはお釈迦様はヴェーサーリーを出られてから、すぐにガンダック河を渡られ、ガンダック河の西側のシワン県を通って、クシナーラーに行かれたと確信するに至ったわけでございます。

Koṭigāma 以降

そしてそこからお釈迦様は再度いったん Koṭigāma に立ち寄られてから、いよいよクシナーラーに向けて出発されました。そこで入滅するという覚悟の旅であったわけです。

涅槃経に挙げられている地名は、先に表をお示ししました通りですが、それらの地点が現在のどこに当たるかという事は必ずしもキチンとわかっているわけではありません。しかし先ほどご紹介しました J.Pandey という方は、次のように想定しております。

Bhaṇḍagāma=Bihar 州、Siwan district、Baḍahariyā 村の近くの Bhalluā

Hatthigāma=Bihar 州、Siwan district、Hathagānī

Ambagāma=Bihar 州、Goparganj district、Kalisthāna の近くの Ameyā
or Bihar 州、Goparganj district、Belwā 村の東 3km にある Amavān

Jambugāma=Bihar 州、Goparganj district、Jamunahān

Bhoganagara=Bihar 州、Goparganj district、Bhore

これを地図に表しますとこのようになります（地図 7）。



これらは全部シワン県とゴパールガンジュ県にあります。しかしどれ一つとして確認できるような証拠はありません。氏は例えばここには 1991 年の調査時点までは 2 基の土で作ったストゥーパがあったが、現在は無いなどと記しています。そこで現地の人に確認してみますとそのようなことは知らないといいます。これがクシナガルのビルマ寺のババジーという現地の人はみんな信用できない、遺跡が見つかって隠す、だから私と一緒に行きましょう、ということなのかもしれません。遺跡なんか

に指定されると、農業ができなくなって困るから、黙っていようということのようです。

私たちがぜひ現地に実際に行ってみたいと思いましたが、ジープでなければとても行けない悪路だということで諦めました。また治安という面でも心配でした。ですからシワン地方の調査はそれこそババジーのような人と一緒にできないののかもしれません。

ともかくこの J.Pandey 氏の説を尊重して、ケーサリヤから先程申し上げました地点を経由してクシナーラーに至る経路を線で結んでみますと、ガンダック東側説は少し南に迂回しすぎているような気がします。少なくとも現在の道路から言いますと、ケーサリヤからゴパールガンジュを通過してクシナーラーに行く道路はもう少し北を通過しておりまして、おそらく古代の道もそうであったろうと思います。バイパス以外の大体の道は古代から連綿と伝えられた道に相違ないと思われるからです。

そうすると ‘Barharia’ や ‘Hathigani’ はかなり南にぶれることになります。瀕死の状態であられた釈尊はクシナーラーを目指して旅をされていました。だから特別の目的があったならともかく、まっすぐクシナーラーを目指されたはずで、ですからこれを見ましても、やっぱりガンダック西岸説が正しいように思います。

以上ずいぶん細かいことを申し上げましたが、私たちはこういう細かいところまでこだわって、お釈迦様の生涯を再現してみたいと思っております。しかし今となっては、2500年も前の歴史的事実を明らかにすることは諦めざるを得ません。ですから私たちは原始仏教聖典の編集者たちがもっていたであろうイメージを私たちも再イメージしてみることを当面の目標としているわけでございます。そのためにもっとも重要なのは、聖典の細かではあるけれども具体的なディテールにこだわることだと考えております。そこにこそたくさんヒントが隠されているに違いないと確信しているわけでございます。ある場面では大胆な仮説というものも必要であると思っておりますが、できるだけ鮮明なイメージを描きだしたいと思っている次第です。

今後ともご支援、お励ましをいただければ幸いです。